
追憶の長谷川千雨

ベンジャミン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

追憶の長谷川千雨

【Zマーク】

Z5530C

【作者名】

ベンジャミン

【あらすじ】

なんかネギまの長谷川千雨が電波を受信したとか、そんな感じのよく分からぬ話です。意味不明な所が看過できない場合「千雨の世界」でググると多少溜飲が下がるかも。微クロス。

彼女、長谷川千雨はある記憶に苦しんでいた。なにも彼女の部屋にある、痛々しいポエムや日記、更にはコスプレ写真についての記憶ではない。

彼女にあるのは、不思議な世界での記憶だった。

千雨の両親が殺され、彼女は肉体改造を受けたあげく、昔住んでいた麻帆良に戻つてくるという記憶だ。荒唐無稽も甚だしい。

だが詳細ははつきりとはしない。おぼろげに様々な人々が見え、断片的なワードが脳内にちらつく程度だ。

クラスメイトの大河内アキラや綾瀬夕映と共に、様々な事件へと立ち向かう。その際に小さなマスクコット風のネズミや、メガネに白衣を着たあからさまな科学者風の人間も出てきた。

「漫画かよ」

チープで良くあるバトル漫画の主要人物の様だ。

記憶、と言うのには語弊がある。これを正確に言つのなら『妄想』と言つのだらう。もしくは『夢』だらうか。

なにせ千雨の両親は健在だし、大河内とはろくに話をした事が無い。綾瀬は席が近いだけあり、挨拶くらいは交わすものの親しいとは言えないだらう。ネズミやエセ科学者に至つては、まったくと言って知らない。

故に長谷川千雨はそれを『夢』と結論づけた。

ときおり見てしまう不可思議な夢、本来ならすぐ忘れてしまうのに、余りに印象が強すぎて覚えてしまう。そんな感覚なのだろう。

自分が大河内や綾瀬と共に、麻帆良を騒がす獵奇殺人の犯人を倒す、など夢想でしかない。

「だつてなあ」

麻帆良学園、女子中等部の寮の自室で、千雨はパソコンチェアに座りながら、近くにあったテレビの電源をついた。

そこに映るのは、最近麻帆良で話題となっている獵奇殺人事件の報道ニュースだ。

ニュースではスタジオ内で事件の経過が、フリップを使って説明されている。千雨からすれば耳からタ「が」であるくらい、聞き飽きた報道内容だ。

確かに、事件は今年の文化祭の終わりくらいだろうか、夏休みの少し前に麻帆良市内で女性の手首無し遺体が発見された。

警察の発表によれば、死因は第三者によると思われる外傷つまりは殺人事件だ。

麻帆良は騒然とし、報道陣が一気に押し寄せた。被害者はウルスラ女子の高校生らしいが、千雨の通う女子中等部にも報道が押し寄せた。

学校では「インタビューに答えないこと」と生徒に厳命を出し、寮との登下校には集団登校が義務付けられた。休みの日の一人での外出も禁止とされた。

とは言つても、夏休みになつた途端、ほとんどの生徒が実家に帰省してしまつわけだが。

その後、犯人の音沙汰は無く、テレビでの報道も減る一方。集団下校は続いていたが、その事件は徐々に忘れられていく事となる。だが、一ヶ月ほど前の十月に事態は一変する。また新しい遺体が発見されたのだ。

同じく手首の無い遺体、警察の発表によれば同一犯との見方だそうだ。

再び麻帆良は混乱の渦となり、件の報道陣がまた帰つて來た。

ニュースの映像は麻帆良市内を映している。千雨も見覚えのある通りだつた。

「あそこでの買い物も、なかなか出来そうにねーな」

お気に入りのクレープ屋が映ったが、この寮からは距離がある。よく休みの日、買出しがてらに寄っていた店だ。

千雨の『夢』は昨日朝起きた時に、いつの間にか脳内へそっと入り込んでいた。思わずベッドで三十分ほど固まってしまった程だ。しかし、冷静に考えれば『夢』も理解できる。その内容は一部を除き、千雨の周囲にあるものを寄り合わせて作られているからだ。

「クラスメイトに、殺人事件ねえ」

思わず一コース番組に悪態をつきたくなる。「お前らが毎日殺人事件なんか報道してるから、あたしが悪夢を見てしまう」と。テレビを見ていたら苛立ちが募つてきたので、その電源を落とした。

「 つたく。それよりネット、ネット」

カタカタとキーボードの音だけが室内に響いた。机の上にはテスクトップパソコンが一つ。

女子寮は相部屋だ。千雨の部屋も例外では無いが、部屋にいるのは千雨一人だった。

もう一人の住人は部屋に帰つてこない事が多く、ベッドや私物が幾つかあるものの、ほとんど千雨の一人部屋だった。

「んー、やっぱアクセスの伸びがいまいちだな。少しブログの『ザイン』も変えてみるか」

余り友達のいない千雨は、ネットにはまり込んでいた。趣味が高

じてついにはコスプレにも手を出してしまっている。

以前、目線で顔は隠したもの、コスプレした画像をネット上に投稿してら、予想以上の反響があった。

褒められるその気持ちよさといつたら、想像以上の快感だった。よつて、千雨はネットアイドルになろうと決意する。

「でも、にわかにやなりたくない。なるなら一番だ、うひひひ」

氣味の悪い笑い声を上げながら、ブログのデザインをイジるためには、テキストエディタを起動してソースをいじつていぐ。

凝り性な性格により、千雨はネットアイドルの下準備として、様々な専門知識を獲得していった。そこそこのプログラムも最近ではすぐに組める様になつたし、ブログのデザイン程度ならわざわざ実物を見なくてもプログラムソースだけで理解できるぐらいだ。

現在は実験的にブログを立ち上げて、様々な事を試していく。来年、ネットアイドルとしてデビューした際に失敗を犯さない様にするためだ。

その日の夜、寮の一室では不気味な笑い声がひつそりと響き続けていた。

明けて月曜日。

ねぼけ眼の千雨は、伊達メガネの下から手を突っ込み、目元をグジグジと擦った。

「あふ

あぐびをなんとか噛み殺すも、その吐息までは消せない。
朝のホームルームに間に合ひつよつて2・Aの教室に辿り着き、ふ
らふらしながら自分の席へと向かう。

「おはよう」「やあこねます、長谷川さん」
「ん、ああおはよう、綾瀬」

隣の席の綾瀬夕映と目が合い、挨拶をする。
挨拶をするだけすれば綾瀬の興味は失せた様で、彼女は同じ部活
のクラスメイトの輪へと入つていった。
千雨は頬杖をつきながら、先日の『夢』を思い出した。

(やつぱり夢だよな)

『夢』の中では綾瀬はいたく自分に『執心だつたらしい』。
とは言つても、千雨にその？ケ？は無い。男性同士のものなら多
少二次元で嗜むが、正直リアルでそんなのは『免だつた。

(つか、ありえねえだろ。女同士つて……)

眠気も合わさり、想像するだけで気持ちが悪くなつた。

だが、同時に寂しさもあつた。『夢』の中ではあれだけ自分と親
しかつた存在が、現実ではああもそつけない。まあ、無理もなかろ
うが。

千雨はふと教室を見渡し、ある人物を見つけた。

長身のクラスメイト、大河内アキラだ。

水泳部期待のホープで一年生ながら次期エースだと、高等部の
人間も目をつけてるとか、男子生徒のファンが多いとか、なんとか

かんとか。千雨がたまたま小耳に挟んだ内容だが、彼女はそんな感じらしい。

淡い期待。彼女ももしかしたら……と話しかけてみる事にした。他のクラスメイトと談笑する大河内に近づき、後ろからそつと声をかける。

「な、なあ大河内……」

余り自分から話しかけた事が無いために、少しどもつた。

大河内は千雨の声に気付き、そつと振り向いた。まさか千雨に話かけられるとは思わなかつたらしく、ちょっと表情に驚きが混じつていた。

「なに、長谷川」

サバサバとした返事。それど、この一言で充分だった。

「あ、いや」「めん。間違いだつた、何でも無い」

「？ そう」

少し眉間に皺を寄せながらも、大河内は千雨の事を気にせず、クラスメイトとの談笑の輪に戻つていった。

(『長谷川』、ねえ)

余り話した事の無いクラスメイトを、いきなり下の名前で呼ぶ人間は少ないだろ?。

それに。

(あたしは何言つつもりだつたんだ。大河内とあたしは幼馴染で、

なんかすゞい前世っぽい記憶が云々 、電波過ぎるだろ）

自分の思考に、ぴくぴくと口元が引きつった。

大体、幼馴染、というのが麻帆良では当然にならない。麻帆良は中高一貫どころでは無く、幼稚舎から大学までの一貫教育まで行っている。

このクラスの半分程が麻帆良の幼稚舎出身であり、千雨もその半分に含まれていた。必然、広義の意味ではクラスメイトの半分が千雨の『幼馴染』なのだ。

実際の所、『幼馴染』という程親しい人は、千雨にはいない。若干人間不信であり、人との触れ合いを苦手としている千雨には、その様な気軽な相手はクラスにいなかつた。

いや、寮の同居人とは多少だが親しい関係を保てている……のか？

（まあ、喧嘩はしないわな。部屋にもあんまり居ないし）

寮の同居人をそっと見ると、なーんか居心地良いんだよな

（あいつと一緒にいると、なーんか居心地良いんだよな）

家族以外の人物と、一緒に部屋にいると若干萎縮してしまうのを、千雨は自覚していた。だが、彼女と一緒にいる時は、なぜかその兆候が無かつた。

（まあ、『夢』は『夢』って事だな）

数日苛まれていた、脳にじびりつく『夢』に、千雨は多少の折り合いでつけるのであった。

ズズズ、と紙パックの中のフルーツ牛乳をすすりながら、体がブルリと震えた。

「やっぱ温かいものにしてべきだつたかな。うう、寒い」

場所は屋上。もつ十一月となり、秋の彩が徐々に失われていって
る。

そのため、昼休みに屋上で昼食を取る人間も減り、周囲はまばら
だ。

千鶴はわざわざ「ザート」を羽織り、更にはフードまでかぶつて
で食事を取っていた。

手には空の菓子パンの袋が一つ。あと奮発した「ザート」用のゼリ
ーもあつた。

「ゼリーって。なんであたしはもつと温かい「ザート」を選ばなかつ
たんだ」

十数分前の、売店にいた自分を恨みたくなる。

どうにも千鶴はクラスの喧騒が苦手だ。昼休みとなると、それは
一層酷くなる。

「ここは幼稚園かよ」

どたばた走り回つたり、机をなぎ倒したり、そんな風になりなが
らも二三二二と笑うクラスメイト。頭が狂いそうになる光景だ。

そのため毎休みになるとクラスから逃げ出し、この屋上で朝食を取るのが千雨の毎回のパターンだった。

「ここも限界だな」

もうすぐ真冬になる。時期的にもそろそろ屋上は潮時だろうと、千雨は思う。
ベンチから立ち上がり、近くの手すりに寄りかかった。
さすがに屋上というだけあり、麻帆良が遠くまで見渡せた。

「魔法使い、ねえ」

『夢』によればここは魔法使いの街らしい。しかし、千雨は幼稚舎からこの街で過ごしているが、魔法なんてものは見た事が無かつた。

視線を遠く、千雨は東京方面へと向けた。

「超能力に『学園都市』って聞いたことねえぞ。それに『学園都市』って紛らわしそぎんだろ」

ここ麻帆良は『麻帆良学園都市』と呼ばれている。そして千雨の『夢』には東京西部を中心とした独立都市『学園都市』なるものが出てきたらしい。超能力を開発している、とかそんな設定らしいが、これらの『太話も同じく、千雨の現実の記憶とは合致しなかった。

「多摩に住んでる親戚の叔母さんちも、『学園都市』ってのに入っちゃまつわけか、ハハハ」

余り親しく無いが、数年前の正月に母方の叔母の家に遊びにいった事がある。確かそれが奥多摩の方だったと記憶していた。

文部省当りがもしかしたら東京西部に学園都市を作る計画をしているかもしれないが、少なくとも千雨は知らない。

「超能力つてのがあるなら行ってみたいかもな、少なくとも『』よりはマシだろ?」「

千雨は自分の人間不信の原因を、なんとなく理解している。自分の弱さを他者に擦り付けるのは嫌だが、実際のところこの麻帆良は千雨に合っていないのだ。

この街そのものが持つ空気が、千雨の波長と合致しない。価値観の乖離は、幼い子供同士の場合極端な『』コニケーション不全に至る。

幸いイジメにまではならなかつたが、昔の千雨は子供の持つ『』ユーティにはうまく入り込めなかつた。

今ならば、作ろうと思えば友人関係を作れるだろ?。それでも、千雨は一人を選んでいる。彼女なりの処世術であり、他者に対する慈しみでもあつた。

話しあう事さえしなければ傷つきあつ事も無いだろ?、といふ暴論にも似た帰結である。

千雨はゼリーのフィルムをペリペリと剥がし、小さなプラスチックスプーンで一気にがつづいた。マンゴー入りのゼリーを、ものの数分で食べ終わる。

胃に冷たいゼリーが入ると、必然体も冷えた。

「うひ……さすがにダメだわ」

「ホールの襟を合わせて、体を縮める。昼食の『』を屋上の『』箱に捨て、校舎内へ戻つていく。

(昼休みが終わるまであと二十分。どうしたもんかな)

教室に戻る、という選択肢はない。

千鶴は生徒もまばらな廊下を、口シロシと呪詛を立てながら歩き

出した。

ひへ

1 (後書き)

全三話予定。一応書き終わっていますが、色々考え中。

「あひだよ～～」

甘ったるい様なわざとらしい猫撫で声を出しながら、カメラに向かってポージングする。

千雨の服装はいつもの地味な私服でも、ましてや制服でもない。やたらにレースとリボンが多用されているブラウスに、傘の様に広がるスカート、頭には大きな帽子が被さり、長い髪も左右で二つに纏められている。

正直、外を普通に歩けるような格好では無かつた。

それはそうだ、これはアニメのキャラクター「コスチュームを模した、所謂「コスプレ」というやつだからだ。ちなみに「コスプレ」をする時だけ、千雨は伊達メガネを外している。

千雨はコスチュームの元となつたキャラを脳内で想像しながら、なりきつた様にポージングを決めていく。決めたポーズと共にリモコンでカメラのシャッターを切り、出来栄えを確認しながら何度も撮影を行なつた。

ときおり決めポーズと共に、自分の決め台詞なんかも叫んでみる。本人は楽しくてしようがないが、第三者が見たらかなり痛い現場なのは明白だ。

「ふう、今日はこんな所か」

撮影が終わり、カメラの「画像データ」をパソコンで表示させ、スライドショウで次々と見ていく。

「ふふふふ、我ながら良いじゃないか」

自画自贊。

自分の「アツたアツの真を見ながら、ニタニタと笑みを深めた。

「おひと、皺になる前に服着替えないとな」

千雨はコスチュームをゆっくりと脱ぎ出す。このコスチュームは千雨が数ヶ月かかって自作したものだ。そのため市販品に比べて明らかに脆い。装飾過多なのもその理由の一つだらう。
千雨は下着姿になる。さすがに肌寒さを感じるもの、それより気になるのはコスチュームの状態だった。

「やべ、肩口のところ、糸がほつれてきてるよ……」

クロードザートの中からリшинを取り出し、下着姿のまま修復を始めた。

更には楽しくなりだし、あれやこれやと様々な変更もし始めた。

「へへ、へへ、へへん」

くしゃみが一つ。

「あ、あたしは裸で何やってんだよ」

自分の姿を思い出した途端、部屋の冷気が一気に押し寄せてきた。

「う、このままじゃ風邪引こまつ」

千雨は新しい下着とパジャマを取り出して、そのままシャワールームへ飛び込んだ。

十分後、千雨は肌を上気させながら、ほつとした表情でシャワールームから出てくる。バスタオルで髪を「じじ」しながら、ハンドドライヤーを出し始めた。

湯冷めしない様に、エアコンの温度も高くする。

「今日も頑張ったぜー」

ドライヤーを使いながら、自分のコスプレ写真の出来栄えに、再び笑みを強くしてしまう。風呂上りにミネラルウォーターのペットボトルのラッパ飲みもした。

髪も乾ききり、さあ寝ようと思つても、それはすぐ出來ない。

「ここの時が一番面倒だよな」

部屋は煩わしい状態だ。デジカメは三脚に固定され、撮影用の背景シートが壁と地面に貼られている。更には光源用のライトまである。どれもこれも機材としての質は低いものの、中学生といつ千雨の身分を考えればかなりの高級品だ。

親の仕送りと、お年玉などのお小遣い、更には試験用に立ち上げたブログの広告収入などを合わせ、千雨がなんとか買い揃えた機材だった。

「よつと、ほつ

機材の一つ一つを解体し、綺麗にまとめていく。一応、千雨の部屋は一人部屋だ。同居人がそうそう帰つて来ないと言つても、その人間のパーソナルスペースを侵略するつもりは千雨に無かつた。

部屋にあるスライド式のクローゼットは、中央を基点に左右で二分割。右側が千雨の領分だ。

そこに入りきるように、機材をうまく入れていく。

おやうぐの部屋の同居人には千鶴の趣味がバレているだらう。だが無口な上に、他者にわざわざ喋るような性格じゃないので、千鶴はそのまま心地いい。

「よし、入りきつた

クローバージットの片側に、機材は綺麗にみっちりと収まっている。そこで一安心したものの、そこで一つ思い出した事があった。

「あ……国語の宿題

漢字の書き取りがかなりあったのを思い出してしまう。しかも担当は「鬼の新田」だ。忘れたら倍返しの上に居残りである。

「なんで、あたしはもつと早く気付かないんだよー。」

慌ててカバンを漁りノートとテキストを取り出す。宿題のページを確認して、サマーっと血の気が引いた。一時間近くかかりそうな量だ。

現在時刻は十一時過ぎ、普段なら寝ている時間だ。

「くへへへへあああー。」

先ほどまで「ひつだよーー」と言っていた面影は消え、半泣きになりながら千鶴は宿題をやり出す。

ちなみに、宿題はやっている途中で寝てしまった上に、翌日は寝坊で遅刻した。更には宿題忘れにより、新田により居残りにされる事となるのだった。

秋も終わりを向かえ、冬になろうとするこの頃、日が落ちるのがめっきり早くなっていた。

今年の一学期の終わりから強制されている集団登下校だが、下校時にはそのシステムは二分割されていた。

当初は部活禁止令まで出たものの、一ヶ月を過ぎても解決しない事件に業を煮やし、部活は再開される事となつた。

そのため授業後に帰寮する『帰宅組』と、部活後に帰る『部活組』、一つの集団下校時間が作られ、生徒はそのどちらかの時間で帰るのが義務付けられた。

そんな中、居残りをした千雨は微妙な時間帯に手が空くこととなつていて。

空は薄暗くなり、夕焼けも沈もうとしている時間帯ながら、体育馆からは元気な声が聞こえてくる。さすがにグラウンドを使う部活はそろそろ上がる様だが。

まだ部活組の帰宅時間まで三十分程ある。千雨としては正直言つてさつさと帰りたかった。

「帰つちまつが」

どうせ三十分もすれば自分の後ろを運動部の集団が歩いてくるのだ、襲われるなんて事は無いだろうとタ力をくくる。

そうと決まればコートを羽織り、カバンを持つて教室を飛び出した。そのまま昇降口で外履きに履き替えて、そろそろと校門を目指して歩いていく。

幸いな事に集団下校の監督をする教師はまだいない様だ。

「よしー。」

そのまま自然な振りをしながら校門を通り、千雨を呼び止めるものなどいない。

「なんとか脱出成功、つて所か」

校舎内から見えないようにながら、そそくさと通りを進んでいった。

(あ、せひこえば)

千雨は昨晩コスチュームを弄っていた時に、欲しい色の生地が無いのを思い出した。あと、色々な小物も出来れば作りたい。むずむずと欲望が沸きあがり、千雨は決断する。

「 奇つていっぢまうか」

現在、寮での門限や外出はかなり厳しく制限されている。今から帰つたのでは、おそらく外出は許可されないだらう。それに一人では外出許可是出ない。一緒に歩いてくれるような、同種の友人などもいない。

そうと決まれば急げ、と千雨は一路コンビニへ向かつた。お金を下ろすためだ。

コンビニのATMで生地に必要な分の貯金を下ろし、商店街にある大きめの手芸店へ向かつた。個人商店だが、ヘタなお店より遙かに品揃えが良い。店員が過剰に対応しないのも、千雨が気に入つてゐた所だった。

店に入るなり「いらっしゃいませー」と挨拶はされるものの、中

等部制服を着ている千雨を見ても特に対応は変えない。

殺人事件が起きる前だったら、おそらく自分と同じように帰りに寄り道する生徒は珍しくなかつただろうが、事件を機にその数は激減している。

それでも何人かは千雨と同じ様に、集団下校を抜け出して寄り道するのだろう。

店員は千雨に気にも留めずに、店内の商品棚の整理をし始めた。千雨はほつとしながら、担当のコーナーへ向かつ。

「ふふふ、これでの公交车もよう元壁に……」

ヒクヒクと口角を吊り上げながら、必死に笑いをこらえる千雨は、ぶつちやけキモかつた。

「ありがとうございましたー」

店員の声を背中に浴びながら、ほぐほぐ顔で千雨は店を出た。紙袋を腕の中で抱える様に持つていて、中身は言わずもがな、だ。

「まさかあの形のボタンまで見つかることはなー。公交车専門店まで出張らなきゃ駄目かと思つてたぜ

どうやらかなりの収穫があつたらしい。

見るからに上機嫌といった風で、千雨は通りを歩いている。

街灯の下、人はまばらだ。

まだ殺人事件が解決していないため、住人も夜の外出は控えているらしい。

「 つて、ああ、またあたしはー！」

パサリ、と紙袋を落しながら、千雨は頭を両手で抱える。手芸店で熱中するあまり、千雨は時間を忘れていた。時間を確認するために携帯を見るが 。

「 げつ……」

そこには何度もコールされた後があった。表示は「女子寮」と書かれている。まさかもなく寮監からだ。

「 ビ、ビビビビビ！」

門限はとっくに過ぎていた。

昨日に続く失態。冷気が首筋から入り込み、ヒヤリと背中を撫ぜた氣がする。

「 イ、いひじぢやこられない」

千雨は手芸店の紙袋をカバンに詰めた。紙袋を露出させたまま帰つたら、取り上げられるのは目に見えていた。持ち物検査されたら結果は同じだが、どうにかその事態は回避せねばならない。更にはこの「ホール回数の多さも」まかせねば。

「 と、とつあえずバツ テリー切れという事にしておくか」

携帯の電源をプチリと切つておぐ。

そして猛然と走り出した。

田指すは女子寮、門限を三十分以上過ぎているが、せめて一時間には至らないようにしたい。というかしないとエライ事になる気がする。

元々体力の無い千兩だが、必死に走り続けた。

普段使わない小道まで駆使し、寮まで一直線に向かつ。

だが、さすがに全力で走り続けていたら、ものの五分でバテてしまつた。

「ゼーはー、ゼーはー」

口をだらしなく開きながら、必死で呼吸する。足はがくがくで、近くにある壁に背中を預けた。夜になり気温も冷えて、白い吐息が空中に舞つた。冷氣が喉下をザラザラにする。

「休んでる、暇、なんて、無い、のに……」

独り言も途切れ途切れだ。

なんかもう怒られたっていいかなー。大体三十分も一時間も大して変わらない様なー。どうせ怒られるんだからもうゆっくり帰ればいいんじゃねー。

そんな誘惑が千兩を襲いつ。

「うん、そうだよな」

そしてあっさりと千兩は誘惑に負けた。

今更ジタバタしたつてしがない、なる様になれだ。と虚勢を張る。

そんな時、少し薄暗い近くの路地に動く影があつた。

「ひつ！」

千雨はビクリ、と過剰な反応をしめした。そして思い出すのだ『未だ獵奇殺人事件の犯人が見つかっていない』という事を。

バクバクと心音が強くなり、サアーッと血の気が引いた。よく見れば千雨のいる路地は薄暗い。

麻帆良のご多分に漏れず、石畳の引かれた道は車道として機能してなく、必然道は細い。

そのため街灯の数も最低限だ。

街灯の影になり横道となつている路地裏を、千雨は硬直しながら見つめ続けた。

ポケットにある携帯に手を当てるも、電源が入っていないのを思い出した。

(な、なんで電源切つちまうんだよ、あたしは〜)

急いで電源を入れようとするも。。。

「一ヤー」
「一ヤー？」

聞こえてきた声をオウム返ししてしまう。

路地から出てきたのは黒猫だ。冷静に考えれば、動いた影だつてかなり小さかった。人のはずなど無いのだ。

「な、なんだよ。そりだよな、いきなり出くわすなんてあるはずねえ……」

猫は声を上げながら、千雨に寄つて来る。

「 、お前、ドリのくせに嫌に入懷つこな」

千雨の足元に、黒猫がすりすりと擦り寄つてくれる。女子寮の裏にもドラ猫が数匹いるのを思い出す。どうやら寮の誰かが餌付けしてくるらしいが、あの猫達は千雨を見るなり親の仇を見るように牙をむき出しに威嚇する。その上、わざと逃げ出してしまうのだ。

それを考えれば、目の前の黒猫はとても可憐く思えた。

「 ょし、じゃあせつかくだからお前に施しをやひつ」

「 ジヤー」とカバンを漁れば、千雨の秘蔵しているステイック型の菓子『ポッキー』が出てきた。ポッキーを一本出し、そのチョコ部分の半分を自分でかじり、残った半分を猫に向けて放り投げた。

「 ニヤー」

猫はかりかりとポッキーを食べ出す。

千雨はしゃがみながら、食べている猫の頭を撫でた。

「 お前も飼い主か、ちゃんとした寝床を見つけねーと、冬が越せないぞ。今年は寒いらしいしな」

猫は相変わらず食べている。そんな猫を見つけると、千雨の心も癒された。

ピクリ、と猫の耳が動いた。

「 お、びり」

千雨が何も言ひ間も無く、猫は食いかけのポツチーを置いて、脱兎の如く走りだした。

「??」

しゃがんでいる千雨の背後には街灯がある。そのためしゃがんでいる千雨の目の前には、自らの影があった。そしてその影に、もう一つの人影が重なった。

「え」

背後には人がいる。地面に作られたシルエット 見覚えがあった。
それは確か『夢』で。

「 ッ!!!!!!」

ザクリ、という音と共に千雨の背中の中の一部が焼け付いた。コートと制服が何か鋭いもので突き破られ、激痛が体中を襲つた。余りの痛さに、自分が何を叫んだのかすら聞き取れなかつた。視界が黒と白に明滅する。まるで炎の中に飛び込んだ様だつた。気付いたら千雨は地面に倒れていた。

ざらりとした石畳の感触が、顔の側面をやすりの様に削つて、男に圧し掛かれていた様だつた。

体に力は全然入らないし、男に少しでも力を入れられたら、背中から激痛が体中に走つた。目からぼろぼろと涙が溢れる。

痛みをこまかそと叫び声を上げようとするものの、無骨な男の手に口元をふさがれ、何も叫べない。

(男 、 こいつ男)

逆行で顔は見えないものの、シルエットは屈強な男の形をしていて、明滅する視界の中、なぜか男のシルエットだけははつきりと確認できた。

（嫌だ、恐い、嫌だ、助けて、助けてよ。もひ、『わたし』は、もううなあウツク）

脳内に激しいノイズが入る。混乱と恐怖と激痛のため、思考は纏まらず、ただ涙だけが溢れた。

先ほどを越える激痛と共に、「ガリ、ガリ」という耳障りな音が体の中から聞こえていた。

固定されていた。伸し掛かれる状態だった。

激痛の根源は右脇痛みの余り 干雨はガンガンと石置は頭を打ち付ける。とてもじやないが、耐えられる様な代物では無い。

視界の片隅で、男が自分の右手を
目大なナイフで切り落とそうとしているのが見えた。

「アシタ」

口に布を詰められながらも、息を呑む自分の声が聞こえた。手を切ろうとする恐怖が、激痛と共に脳内を駆け巡る。

ああ、これで意識を失えたらどれほど楽なのだろう。だが、現実は無情だった。

千雨が意識を失えど、激痛で再び起きてしまう。
一時間だろうか、十時間だろうか、それとも十秒なのか。千雨に

時間の感覚は無い。ただ、ひたすら長く感じられた。

「ゴリゴリと骨を削る音が聴覚を支配し、体の内側全てを針が貫いてるような激痛が絶え間なく襲った。

右手を切り取る。生きている千雨を押さえつけながら、それを行なう男。異常な光景だった。

（やメロ、ヤメロ、ヤメロ、ヤメロ、ヤメロ、ヤメロ、ヤメロ、ヤメロ、オ願イダカラヤメテクレー）

田は見開き、涙が滂沱の如く溢れ、鼻水も飛び散り、布を敷き詰められた口の端からは涎が跳ねた。

痛みを誤魔化すために、痛みを自らに課した。ゴシゴシと頭を石畳に叩きつけるのが、無意識の衝動だ。

全身が恐怖に浸される。

そんな千雨を、男は『笑いながら』見ていた。

（ワラッテイル　）

千雨の視界は定まらない、だが男の口元が三日月を描いてる事だけは分かった。

「アアアアアアアツツツーーー！」

「コトリ、と何かが落ちた音がする。もはや右手の先の感覚は無くなっていた。千雨の周囲には巨大な血溜まりが出来ていて。寒いのは冷氣のせいだけではないだろう。

男は無言のまま、その手に持つ血に濡れたナイフを振り上げた。

（あつ　）

光景が、ゆっくりと過ぎていいく。千雨はなぜかそのナイフが待ち遠しく感じられた。もつすぐこの体を覆う苦痛から解放される、そういう本能が求めるのだ。

そして脳内に様々な人の顔が過ぎた。両親、数少ない友人、クラスメイト、寮の同居人、そして 声。金色の小さな影。動物、なのだろうか。

(あの『ネズミ』は、何て言つた　)

漆黒。

千雨の意識はそこで切れた。

『えー、只今緊急のニュースが入りました。

今年の七月より続いている『麻帆良連続殺人事件』の続報です。つい先ほど、埼玉県麻帆良市において新たな遺体が発見されました。

被害者は麻帆良学園中等部に在籍する『長谷川千雨』さん、十四歳です。

遺体は今日の午後七時半頃、長谷川さんの住む寮の近くの通りで発見されました。

遺体には過去の殺人事件と同じく、右手の欠損があり、同一犯との見方がされています。

警察の発表によれば、まだ死亡時刻は特定出来ないものの、長谷川さんが午後五時に学園を出たとの証言を得ているそうです。

他にも続報が入り次第お伝えしようと思います。では次の

『

つづく。

2 (後書き)

一応まだ続きます。

ぼやぼやとぼやけた意識を振り払う。
なんだかいつの間にか寝ていた様だ、と千雨は思い出す。
どうにも記憶が曖昧だった。なにか恐ろしい『夢』を見たような
気がする。

(いや、今はそれどころじゃないな)

なにせ授業中だ。
さすがに板書もせずにしていたら、教師から大玉玉を喰らうだろ
う。

「あれ？」

そう思い、黒板を見て違和感に気付く。

(あんな公式やつたつけ)

数学の時間、黒板には見覚えの無い公式が書かれていた。前回や
つた授業とは大分違う。

(おかしいなー、もしかして教師がページ間違えてるんじや)

周囲を見渡すが、クラスメイトの誰もが普通に板書をしていた。
こういう時に率先して教師に質問をする雪広あやかも、平然と授業
を受けている。

(え？ もしかしてあたしつて遅れてるのか？ もうすぐ期末だつ

ての元、得意な数学すら付いていけないなんて（）

思わずショックを受ける。

そこで更に衝撃的な事に気づいた。

黒板の端に書かれている日記、それは（）。

「じゅうじがつ……」

十一月。窓の外は曇天模様で、まさに冬といった様相をしていた。

（いや、だつて昨日まで十一月だつたろ、なんでもう十一月。それにこの日にちじや期末なんて終わつてゐるし。あたしは期末を受けた記憶なんて自分のノートを確認しようと、机を見た。だが、そこにノートなど無い。）

あるいは花瓶と、花瓶に挿されている一輪の菊の花だけだ。

「えつ」

千雨は言葉を失つ。思考すら固まつた。

周囲のカリカリとうノートとシャープペンが擦れる音と、教師のボソボソと喋る声だけが響く。

「おいー。これは何だよー！」

千雨は立ち上がり叫んだ。だが、周囲は無音。千雨の声にも一顧だにしない。

「へつ」

その反応に、千雨は恐怖する。まるで周囲の人間には自分が見えてない様な。

「おい、綾瀬。これはどんないたずらなんだよ、悪趣味すぎやしないぞー。」

隣の席の綾瀬夕映の肩を強く揺する。しかし、小柄なはずの綾瀬だが、まるで岩の様に硬く、微塵も体は揺れなかつた。

「なんか言えよ、頼むからさあー。」

綾瀬を諦め、周囲の人間に呼びかけるも無言。

「くそー！ くそー！ どうなつてるんだー！」

千雨は教室を飛び出すために、後ろのドアを開けようとすると、

「くっつ、堅い」

まるで引き戸が接着剤で固定されている様だった。

だが全身の力を振り絞り、体重を掛ける事で、引き戸が少しだけ開いた。

「よしー。」

どうにかその隙間に身を滑らせ、千雨は廊下に飛び出した。

ガラリ、と音がしてクラス全員が後ろを振り返った。

「え、何？ 今の音」

「何でドア開いてるの」

「おいおい、誰だ誰だ、ドアを開けた奴は」

クラスの喧騒を、教師がピシャリと押し留めた。クラス内を見渡すが、誰一人欠席はないし、教室を出て行った生徒もない。だが、教室の後ろのドアは少しだけ開いていた。
引き戸とはいえ、風で動くよつな代物では無いだろう。

「お、おい。誰がやつたんだ。今言えば先生は怒らないぞ」

廊下に人影も無い。足音もしなかつた。ただドアだけが動いたのだ。

「嘘！ マジでドアだけ動いたの」

「だつて誰も席から離れなかつたじやん

「も、もしかして」

クラスメイトの視線が一つの席に向けられた。

花瓶が置かれた席、そこは先日殺人事件に巻き込まれた少女の席だつた。

「ま、まさかー」

「いや、でもそれくらいしか」

「お喋りはそれくらいにしろ！ 先生はこうこうイタズラは嫌いだぞ！ やつた者はさつさと白状なさい」

教師の言葉に再び皆が黙り込む。

ドアが開いた時、クラスの全員が前方の黒板を見ていた。ただ二人を除いて。

そのうちの一人は、無言ながらもその現象に内心驚いていた。だが、周囲に話す事はない。なぜなら、彼女には確信があったのだ。

千雨はどうにか学校を抜け出し、街中に来ていた。
あの場所にいたら気が狂いそうだったからだ。

「なんなんだ。本当にわけわかんねえ」

街を歩く人達は皆厚着をしている。そんな中、千雨だけはブレザーにスカートといつも通りの制服だ。しかし、不思議と寒さは感じなかつた。

通りすがりの人物は、千雨の姿を見ても不思議に思わない。いや、まるで視界にすら入つてないかの様に。

「おい、まさか。嘘だろ」
試しに近くの人間に話しかけてみる。

「なあ、おばさん。あたしが見えるよな！ なあ！」

買い物をしに着たのだろう、手にエコバッグを持っている中年の

女性は、千雨の声に一切反応しない。それどころか顔の前で手を振つているのに、瞬きすら自然なままだった。

「は、ははは。どうなってんだよ……お父さん、お母さん、助けてよ」

弱気になつて咳き、氣付く。そうだ、両親に連絡をしよう。

「携帯電話、携帯……」

スカートのポケットに？右手？を突っ込む。

「は……」

何故今まで気付かなかつたのだろう。右腕の先、ブレザーの裾から先には？何も無かつた？。

文字通り、右手首から先が、綺麗に切断されていた。

そうだ、綾瀬の肩を揺すつた時にも、教室のドアを開けた時にも、右手は使つていなかつた。

「う……あ……」

混乱。グルグルと思考が逆流し、記憶を刺激する。千雨の網膜に、あの時の出来事がまさまさと蘇つた。

「そうだ、あたしはあの時　　」

逆光の中の男性、体を巡る激痛、黒猫、血、大振りのナイフ、刃の光、口に詰められた布、骨が削られる音。

「あたしは、死んでいるのか」

「

体から力が抜ける。

千雨は地べたに座り込んだ。冬にも関わらず、地面の冷たさすら、今の千雨には伝わらない。

千雨は通りの中央で、呆然としながら座り続けた。

猛烈な孤独感に襲われ、とても人のいない場所に行く気になれないからだ。

ここに居たからといって、誰かに気付いてもらえるわけではない。それでも、人波に埋まる事で、少しだけ渴きが癒えた気がする。あの時の光景がフラッシュバックする度に、恐怖が蘇つてくるのだが、不思議と恐怖は少しずつ和らいできた。

座りながら自分の持ち物を確認するが、ポケットの中には何も入っていないかった。

右手が無くて不便だったが、体中探したもの、携帯電話も財布も寮の鍵も無い。

「どうしよう」

「自分が幽霊だ」という想像も、現状を省みれば信じざるを得ない。そしてそれを自覚すると、誰かの携帯電話を使えばいいのではという結論に行き着く。

「やつだ、緊急事態なんだ。多少我慢してもうりやつ」

とにかく両親の声が聞きたかった。

近くを歩いている不良の様な男子高校生を見つける。不貞の輩なり、多少罪悪感も紛れると思い、彼の後ろポケットからはみ出る携帯電話を取りうとした。

「悪いが、借りるぜ」

携帯電話を手で掴むも、その堅わりにビックリした。まるでポケットに完全に固定されている様だ。

「ちよ、どうなってやがるー。」の、へたー。」

携帯電話を掴んだまま、千雨は男子高校生にずるずると引つ張られる形となる。

そして地面に盛大に転んだ。

「う、嘘だろ」

男子高校生は普通に歩いており、千雨が携帯電話に触れた事すら気付いてなさそうだ。

「クソ、クソ。どうすれば良いんだよ」

帰りたい、そういう気持ちが沸く。そして、自分の寮の部屋が気になりだす。

「やつだ！ あたしの部屋ー。」

千雨は寮を目指して走る。

いつの間にか日は沈み、周囲は薄闇に覆われていた。

まるである日の様だ。とは言つても、千雨にとつてはつこ先ほど
の様に感じられるが。

あの時とは違つて、安全な道筋を進みながら、女子寮へとやつてく
る。

Hントランスは自動ドアだ。案の定、千雨には反応しない。

「……待つか

千雨は誰かが通るのを待つた。五分ほど経ち、ちょっと買い物に
でも行くのだろうか、財布を持った一人組みの女子が、内側から自
動ドアを開けた。

「今だ！」

一人とすれ違う形で、千雨は女子寮へと潜りこんだ。
ずんずんと廊下を進みながら、自分の部屋へと向かう。
見慣れたドアの前で、千雨はとりあえずドアノブを回してみた。
だが、堅くてピクリとも動かない。

部屋の鍵も無い。

「どうしよう

インターフォンを押せるか分からぬが、どうせ中には誰もいな
いだらう。

千雨は苛立ちを露そうともせず、ドアを蹴つた。

「このー！ クソー！ なんで！ あたしが！ こんな日ー！ 遭うん
だよー！」

蹴りながら、目に涙が溜まつていった。

だが、千雨が全力で蹴つたせいか、ドアが少しだけ動いた。力チカチと金属が擦れる音がした。

そして、内側からガチャリという音が聞こえる。

「え？」

鍵を開ける音。まさか住人がいるのか、と目を見張れば。開けられたドアの先には、千雨の寮での相方 同居人が立っていた。

どうせ見えまい、とタカをくぐり、ドアの隙間から内側に入ろうとするも。

ガツン、と見えない壁の様なモノに千雨はぶつかり、痛みにうずくまってしまう。

「な、なんだこれ」

ペタペタと触る。ドアは開いているのに、ドアを境に透明な壁が存在していた。

そして、千雨の同居人がそんな？千雨を見ていた？。

「え？」

千雨は同居人の視線に気付く。

「お前、まさかあたしが見えるのか」

千雨は自分を指差し、相手に呼びかける。同居人はコクンと頷いた後、ドアを開いて千雨を招き入れた。

『寮の部屋の入室許可』を入手しました。

千雨は部屋に入り同居人 ザジ・レイニー・デイを見つめた。彼女は今日、初めて千雨と視線を合わせた人物だった。

「お前、本当にあたしが見えるんだな。良かつた、良かつたよお

うわあ～ん、と涙を流しながら、千雨はザジに抱きつぶ。ザジは千雨の背中をぽんぽんと擦った。

熱を今まで感じなかつた千雨だが、ザジの体の暖かさだけは感じられた。その暖かさは、千雨の存在そのものを包み込んだ。十分ほど達、千雨はザジから離れた。

「うぐ、すまねえ。でもあたし嬉しくてさ

涙を流しながらも、千雨の顔には苦笑いが浮かんでいた。

「なあザジ、あたしはどうなつたんだ。あたしが死んだのはわかつたんだが、それから今まで何があつたんだ」

千雨は口早に質問するも、ザジは首を傾げるばかりだ。

「おー、何とか言つてくれよー。」

また不安が過ぎる。

「おひつてばー!」

「じめん。聞こえない」

ポツリ、とザジが言葉を漏らした。

「え、聞こえない?」

千雨は白いの口元を指差す。そつするとザジは「ククク」と頷く。

「あ、あたしの姿は見えるが、声は聞こえないっていつのかよ……」

せっかく光明が見えたと思ったが、反動で再び落ち込む。

「で、でも。だつたら」

部屋を見渡した。だが、部屋の中に物は少ない。

本来、千雨の私物が大量にあるはずなのだが、千雨の物だけ綺麗に無くなっている。おそらくこの一ヶ月の空白の間に片されたのだろう。ザジの私物が少し置いてあるばかりだ。

ザジは普段、麻帆良に常設されているサークルで寝起きをしている。一応学園の規則上、寮生活を送っている形になっているが、学園から特別許可を貰い、あちらでの生活を主としているのだ。そのためザジの私物は少ない。幾つかの着替えに、部屋に最初から置かれている勉強机とベッドの上に、幾つかの小物が載るばかり。千雨はザジの机の上に田井でのものを見つけた。

ボールペンとメモ帳だ。

「ちよっと描つるぜ」

千雨はボールペンを握むが、とんでもなく重い。

「な、なんて重さだ

力を振り絞り、じうにか持ちながら、メモ帳に何かを書いてみる。されど、インクはまったく出なかつた。

「ふ、不良品かよー」

ザジが横からポイ、っと千雨の持つているボールペンを取つた。メモ帳にペンを走らせれば、さらさらとインクの跡が残る。

「あ、あれ。普通だな」

千雨は腕を組んだ。一体じつに何てこりゃんだい。

「このボールペン、あげる

「え?」

ザジにボールペンを手渡しされた。やうしたら、先ほどまで重かつたボールペンは、普通と回り転て、両手で悠々と持てていた。

《ザジのボールペン》を入手しました。

「おお、今度は書ける

幸い千雨は左利きだ。右手がないために紙は押さえられないものの、ザジが協力してくれた。

さらさらとボールペンで書ける事を確認した後、千雨は筆談でザジに聞ける事を片っ端から聞いていく。

千雨が殺された後、麻帆良はやはり大騒ぎになつたらしい。

一週間ほど学校は休校となり、部活禁止令も出された。

その間に、千雨の告別式も隣の市で行なわれ、クラスメイト全員が参加してくれた様だ。

ちなみに千雨の両親は、麻帆良の隣の市で生活している。電車で十分もかからないだろう。だからこそ、麻帆良での幼稚舎からの貫教育を受けさせているのだ。

寮の同居人であるザジにも、千雨の両親は挨拶に来たらしい。そして部屋の遺品の片付けも一緒にやつたとか。

「だから何も無いのか。つか、あたしのパソコンにコスチュームも

死んだ後とは言え、まさか自分の秘密の私物を両親に見られるかと思うと、羞恥が走る。

その後はいつも通りに時間は過ぎたとの事。どうやら、またもや犯人は捕まつてないらしい。

「まだ、捕まつてないのか」

ギリリ、と残った左拳を握り締めた。

そして異常があつたのは今日だつたらしい。ザジが言つには、ふと気付いたら授業中に千雨が席に座つてたらしい。

最初は驚いたものの、まるでホログラムの様に揺れ、少し経つてから形が保たれたらしい。

だが、クラスの誰もが千雨を見ない。ザジも最初は幻覚か何かと思つたが、教室のドアが開いた事で、千雨の存在を確信したらしい。そしておそらく千雨が寮の部屋に戻つてくる事も予測し、珍しくこの場所で待つっていたとの事。

「そつか。お前はあたしの事見えてたのか。そりや教室であたしの事指摘されたら変人扱いだよな、まあとにかくありがとう。待つてくれてさ」

ペンでさらさらとお礼の言葉を書くと、ザジは「クンと頷いた。

「でも、なんでザジだけ見えるんだ。他にも誰か」

と思い考える。誰が自分を見てくれるのだろう、親しい人物だろうか。クラスでザジ以外に親しくした人間がいただろうか　いや、いない。大抵の場合、千雨は一人で行動していた。

そのため、週に数回だけ部屋に帰ってくるザジと、一番行動を共にしていた気がする。

「……ぼっちだつたからか」

ズーン、と重い沈黙が過ぎた。声は聞こえずとも、ザジもなんとなく察したらしい。

落ち込む千雨の頭を、無言のまま撫でた。

「これからどうしよう」

千雨は考える。自分が死んだという事は、痛いほど良く分かつた。ならば、なぜ自分は幽霊などになつたのだろう。そしてこれから何をすればいいのか。

ザジが気を利かせて、部屋に備え付けのテレビの電源を入れた。映つたのはニュース番組、そして千雨の写真だった。

「あ、あたし」

ザジがチャンネルを変えようとするのを、千雨が制した。そしてモニター画面をじっと凝視する。

ニュースキャスターが、千雨について話している。ビリやから麻帆

良の殺人事件の特集をやつてゐらしい。

件の名物学園長が映り、千雨を「優秀で社交的な生徒だった」などと言っていた。

今度は告別式の映像に切り替わり、クラスメイトが参列している。そしてその中央には遺影を抱えた千雨の両親がいた。

「お父さん、お母さん」

また涙が溢れた。

一人は氣丈に振る舞いながら、報道陣に向けて頭を下げた。

マイクを向けられると、どうにか言葉を綴つて答えていたが、途中で泣き崩れてしまつ。

「うう……うわああああ

床に千雨の涙がぼたぼたと落ちる。だが、涙は床に触れると綺麗に消えてしまった。

ほんの数分程の映像だったが、それだけで充分だった。

泣き崩れる千雨の背中を、ザジはまた撫で続けた。ザジには千雨の嗚咽は聞こえない、だが聞こえなくとも分かつていた。

ふと声が聞こえた。

「千雨、お前はそうやって泣き続けるのか？」

違う、「このままでいられるか。
悔しい。一方的に何もかもを奪われたのが悔しい。

千雨の中にある『夢』の断片が、様々なモノを千雨に見せ始めた。その多くが理解できない。されど、その中に光るモノだけはわかつた気がする。それは自分も持っていた。

「そりだ終わらせない。終わらせるかー！」

唯一残った左手で、自分の胸元を強く叩いた。

目に、微かな光があった。意志、千雨が貫き通そうとする、？光？の断片。

自分を殺した男のシルエットが過ぎた。あの男、自分の右手を奪い去った男。

考えると、傷口がずきずきと傷んだ。

その痛みが、ぼやけそうになる思考をクリアにする。

自分は死んだ、だが存在はしている。

奇跡としか言えない可能性。それでも、まだやれる。

「あたし　いや、？わたし？が捕まえるんだ！」

テレビには、千雨が襲われた現場が映されていた。それを凝視する。

そう、まだ終わってはいないのだ。

ステータスその1

NAME：長谷川千雨

職業：幽霊

性別：おんな

レベル：0（－1）

HP：10

MP : 0

ちから : 1
すばやさ : 5
たいりょく : 1
かしこさ : 11
うんのよさ : -5

所持スキル

- ・【遠い記憶その1】 記憶の断片
- ・【ゆうれい1】 幽霊の嗜み
- ・【プログラム1】 プログラムの作成
- ・【許可無き自由】 許可無く、他者の所持品を使えない、他者の領域に入れない
- ・【欠損部位《右手》】 右手首を失っている。全ステータス -2
(-2)
- ・【 の 】 まだ君は戦える

所持品

- ・ザジのボールペン ザジより貰つたボールペン
- ・寮の部屋の入室許可 元自室に自由に入れる

- 1 死んだためにレベルは初期化。だがステータスは完全には初期化せず、生前の名残あり。
- 2 利き手が欠損している場合は -3。

所持品

- ・ザジのボールペン ザジより貰つたボールペン
- ・寮の部屋の入室許可 元自室に自由に入れる

ステータスその2

NAME : ザジ・レイニー・デイ

職業 : 道化師

性別 : おんな

レベル : 15

HP : 120

MP : 65

ちから : 17

すばやき : 25

たのりよく : 21

かしこさ : 14

うんのよさ : 16

所持スキル

- ・【道化師2】 他者を楽しませられる
- ・【ペルソナ1】 ペルソナを被る事ができる
- ・【アーティファクト】 ??
- ・【】 ?

つづかない。

3（後書き）

といつわけで終了。

幽靈になってしまい、様々な制限が付くことにより、日常がRPGの様になってしまふ、みたいな。

・目標は謎のシリアルキラー（笑）を倒すこと。

・【許可無き自由】は【やうれい】スキルが上がると相殺されいく。

・レベルはおおよそ年齢[＝]±2くらい。成人になるまでは大体平均で一年に1レベルあがる。

・一般人はレベル概念を知らない。

・ちなみに千鶴さんは幽靈になってしまったので、現状のままじゃレベルが上がりません（笑）。（いわゆるRPGのザコ敵状態）にかしらの外的要因によりロック解除しないと無理。クソゲーすぎる……。

補足もおしまい。

元の話書くのに戻ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5530u/>

追憶の長谷川千雨

2011年11月15日11時28分発行